

青年期の発達課題 —保育者を目指す学生の記述から—

Developmental Tasks in Adolescence —Based on analysis of description by students aiming to be a childcare workers—

別所 崇
BESSHO Takashi

キーワード：青年期，発達課題，コミュニケーション能力，自己の確立，経済的自立
Key Words：Adolescence，Developmental Tasks，Communication Ability，Self-identification，Financial Independence

1. はじめに

本稿では，本学地域こども学科（以下，本学本学科）2 回生の「相談援助」の講義の中で，学生の自己覚知を促すため，講義内において記述を求めた自己分析シートを分析した結果について，青年期の発達課題と関連させて考察してみたい。本学は，短期大学という性格上，2 年間の修業期間を終えて，すぐに就労を果たす学生が多数を占めている。その2 年目に差しかかった学生にとって，今の自分にとっての発達課題とは何か，を考えることは有用と考えられる。

昨今の大学・短大進学率と大学卒業後に進学も就職もしていない状態にある者（進学準備中や就職準備中も含む）の数の推移を見てみると，平成 27 年 3 月現在での前者の数値は 56.5%（短期大学のみは 5.1%）であり，前年比では 0.2 ポイント（同 0.1 ポイント）の減少ではあるが，高い水準にある。後者は 10.3%（前年比-1.8 ポイント）でやや横ばい傾向（文部科学省，2015）¹⁾にある。また，文部科学省（2008）²⁾によると，近年の若者の職業移行のプロセスについて，「職業の選択や決定を先送りし，進路意識や目的意識が希薄なまま「とりあえず」進学したり，せっかく就職しても長続きせず，早期に離職したり，安易にフリーターを選択したりする若者」が多くなっているのではないかと指摘がなされている。つまり必ずしも職に就くというわけではない若者の姿が浮かび上がる。このようなことから，現代の若者のモラトリアム傾向を読み取ることができるのではないだろうか。このモラトリアムについては，ベネッセ教育総合研究所（2005）³⁾が実施した大学生への調査で，大学への進学理由の中の“すぐに社会に出るのが不安だから”の項目に対して，<とてもあてはまる>と<ややあてはまる>と回答した割合が，56%を占めていた。また 2 年後の同研究所の調査（2007）⁴⁾では，大学進学動機のうち“モラトリアム志向”と分類される回答が 25.3%あったことが報告されている。（これは，2002 年に行われた同様の調査と比べて+1.8 ポイント）

次節で詳述するように，エリクソン（E.H.Erikson）は大学在学期を心理・社会的モラトリアムの時期とし，社会へのかかわりを猶予された時代とする。しかし本学本学科の学生は，保育士資格・幼稚園教諭および小学校教諭二種免許（小学校教諭免許は教育コースのみ）が，卒業と同時に取得できる。したがって卒業＝保育者（教育者）としての就労，の図式が確定している状況で，2 年間（長期履修生を除く）を過ごすことになる。本学の学生は，受験する際に本学を志望することが，将来の職業に直結しているということを，十分意識して進学をしているはずであり，入学後の講義・実習を通じて，将来の職業への同一化を迫られることになる。そのような状況の中で，学生が記述した発達課題について検討することを，本稿の目的とする。

2. 青年期の発達課題

では、青年期の発達課題について、先人たちがどのように考えていたかをまとめてみたい。人が成長・発達していく上で必要な発達課題については、エリクソンの発達段階の理論がまずは挙げられるであろう。エリクソン(1989)は、人間の誕生から死に至るまでの、心理・社会的発達の諸段階を8つに区分し、それぞれ以下のように対立軸として整理した。

・第Ⅰ段階(乳児期)	基本的信頼	対	基本的不信
・第Ⅱ段階(幼児期初期)	自律性	対	恥, 疑惑
・第Ⅲ段階(遊戯期)	自主性	対	罪悪感
・第Ⅳ段階(学童期)	勤勉性	対	劣等感
・第Ⅴ段階(青年期)	同一性	対	同一性混乱
・第Ⅵ段階(前成人期)	親密	対	孤立
・第Ⅶ段階(成人期)	生殖性	対	停滞
・第Ⅷ段階(老年期)	統合	対	絶望, 嫌悪

ここでは、青年期の発達段階として同一性とその対立命題としての同一性混乱を挙げている。エリクソンは同一性について、「同一性という偏在的な感覚は、幼・児童期に経験してきた変化する多様な自己像(そして青年期に劇的に再演されるそれら)と、若者たちに対して選択と傾倒のために提供される様々な役割機会とを、徐々に調和させていくものである」⁵⁾と述べている。また、一方でこの時期に引き起こされる不協和特性として、役割拒否があると述べている。役割拒否とは、「同一性の形成に役立つと思える役割や価値と、自己には異質なものとして抵抗し戦わねばならぬ役割や価値とを峻別しようとする、積極的かつ選択的な衝動である」⁶⁾と述べ、かつ「同一性の形成は或る程度の役割拒否なしには不可能である」⁵⁾とも記している。このように青年期とは、自分は何者であるか、自分は何ができるのか、何がしたいのか、といった、いわば自分探しの時期であるということが言えよう。そして、同一性が確立されるまでは、自分自身が何者であるかを模索しながら揺れ動き、やがて安定した自己像を確立していく時期でもある。これを、エリクソンは「心理・社会的モラトリアム」⁷⁾と名付け、「性的にも知的にも成熟に達するが、最終的なコミットメントの延期を認可されている期間である。(中略)これは社会全体の適応的な自己革新にも極めて重要な意味を持っている」⁷⁾と述べている。

人が成長・発達していく上での発達課題について、連続性を重視したのが、ハヴィガースト(R.J.Havighurst)である。ハヴィガースト(1995)は、「発達課題は、個人の生涯にめぐりくるいろいろの時期に生ずるもので、その課題をりっぱに成就すれば個人は幸福になり、その後の課題も成功するが、失敗すれば個人は不幸になり、社会で認められず、その後の課題の達成も困難になってくる」⁹⁾と述べている。ハヴィガーストは、人間の生涯を幼児期～老年期の6期に分け、それぞれ6から10の発達課題を挙げている。とりわけ、青年期の発達課題については、①仲間集団の経験、②独立性の発達、③人生観の発達の3つに分類して、それぞれ表1のように10の発達課題を設定している。

ハヴィガーストは、「人は成長するにつれて、自分が新しい身体的な技能と心理的な資質を所有していることに気づく」¹⁰⁾と指摘し、ある課題は身体的成熟によって、またある課題は社会の文化的な圧力によって、そしてある課題は人の人格や自我を形成している個人的価値と抱負によって、それぞれ生じるが、結局のところはそれらの相互作用によって生じると述べている。

これら、エリクソンやハヴィガーストの提唱した発達課題にかかわる理論は欧米人のケースを元にしたものであり、それが日本の青年期にあてはまるとは言えないものもある。この点に関しては、永井ら(2008)が、近年の「青年期の長期化現象」に関連させて、思春期・青年期の課題として、①身体の成熟の受容、②親からの心理的分離と自律性の獲得、③同世代の同性・異性との関係の発展、④何らかの活動やグループなどに関わり自分の価

表1 ハヴィガーストによる青年期の発達課題⁸⁾

仲間集団の経験	(1) 同年齢の男女との洗練された新しい交際を学ぶこと (2) 男性として、また女性としての社会的役割を学ぶこと
独立性の発達	(1) 自分の身体の構造を理解し、身体を有効に使うこと (2) 両親や他の大人から情緒的に独立すること (3) 経済的な独立について自信をもつこと (4) 職業を選択し準備すること (5) 結婚と家庭生活の準備をすること (6) 市民として必要な知識と態度を発達させること
人生観の発達	(1) 社会的に責任のある行動を求め、そしてそれをなしとげること (2) 行動の指針としての価値や倫理の体系を学ぶこと

(ハヴィガースト (1995) p.122-167 の内容を元に、筆者が表にした)

値観や役割をその中で試行錯誤していくこと、⑤自分がこれから生活していく社会や社会のしくみについて知識を持ち、社会人となる準備をすること、⑥基本となる自分自身の価値観と将来の自己像の展望を持つこと、の6項目を挙げ、「こうした課題の中で(中略)青年期は社会化に関連した課題、先ほどの項目で言うと③,④,⑤,⑥が中心となってくる」¹¹⁾と述べている。また千原(2006)は、現在の日本の青年期の発達課題について、①身体的変化への適応、②抽象的思考能力の発達、③心理的離乳と情緒の安定、④価値観の確立、⑤職業や家庭生活の準備、⑥友人への適応、⑦余暇の有効的利用の7項目にまとめている。千原はこれらを挙げた理由として、「日本の場合は、身体的変化への適応や学習能力の重視や、(中略)ゆとりや余暇志向を目標としているのを反映している」¹²⁾と述べている。続けて千原は、青年期後期の若者が何をしようとしているのかを具体的に知るために、18歳～23歳までの学生133名に自由記述式のアンケートを実施し、その結果を分析し考察を加えている。¹³⁾この千原の研究は、対象とする年齢が本研究と近く、千原が実施した1993年段階と現在とで、結果にどのような違いが現れるかという点を明らかにすることで、大学生が青年期の発達課題をどのように捉えているか、についての時代変化を論じることのできるのではないかと考えた。これについては、節を改めて本研究の結果との比較を試みてみたい。

3. 学生の自由記述の分析

3-1 手続き

地域こども学科2回生対象の相談援助の講義内において、自己覚知の単元の一環として、学生に自己分析シートを配布し、「現在の自分自身を振り返って、これから社会に出たり、結婚して家庭や子どもを持ったり、大人としての社会的役割が必要となってきますが、そういう道を歩むあなたにとっての現在の発達課題(今やっておきたいこと)は何ですか?自由に書いて下さい。」と教示をし、自由に回答を求めた。実施は2016年7月中の講義内であった。

3-2 結果

学生70名から回答を得た(女子39名、男子31名、回収率100%)。総回答数は228個で、個人別の回答数は1個16名、2個10名、3個12名、4個12名、5個11名、6個4名、7個4名で、最多は14個1名であった。平均で1人当たり3.3個となった。

3-3 倫理的配慮

学生には、自己分析シートを記述させる前に、回答は必須ではないこと、講義の評価としては扱わないこと、学生の書いた内容次第で、本学の研究紀要(教員がその研究成果を発表するための冊子)に研究報告として掲載する可能性があることを伝えた。シートの回収後、回答をまとめたところ、学生が自らの発達課題について、真剣に向き合っているこ

とがよくわかった。そのため、後期の講義が始まってから改めて学生に対し、①自己分析シートを書いてもらう際に伝えたように、本学の研究紀要にまとめて発表したいこと、②掲載にあたっては、記述の内容をまとめて統計的に扱うので、個人名は絶対に出ることはないこと、③もし、自分の記述した内容を掲載してほしくない場合は、1週間以内に申し出てくれば、統計データにも使用しないこと、の3点を伝えた。その結果、原稿提出時点までで、掲載拒否の申し出はなかった。

3-4 カテゴリー化

総回答数 228 個を、似通った回答をまとめて、10 個のカテゴリーに分類した。カテゴリー化の手続きについては、学生の自由記述の回答を一覧にし、複数回答が多かった「貯金、お金の管理」、「社会人としての知識や常識(ルール)を身につける」、「料理の習得、家事」、「コミュニケーション力をつける」については、そのままカテゴリー名とした。また、複数回答が多かったもののうち、〈勉強、ピアノを頑張る〉については、同様の回答とまとめてカテゴリー名を「学習・知識の習得」とした。その他については、上記以外で多かった回答、〈自己理解をする〉、〈遊ぶ〉、〈就活、資格・免許の取得〉、〈親孝行、地域との関わり〉、〈感情的にならない〉を基に、筆者が適切だと思われるカテゴリー名をつけた。それぞれのカテゴリーには、カテゴリーを代表する回答と同様の趣旨の回答を加えた。カテゴリー化の際、古沢(1968)^{注1)}の自我同一性の下位分類 5 項目、および 2 節で述べた永井ら(2006)の青年期の発達課題 4 項目^{注2)}をそれぞれ参考にした。まとめた内容は、表 2 の通りである。

4. 考察

今回の自由記述をまとめてみたところ、「自己の確立」と名付けた回答が最も多かった。特に、〈自己理解をする〉、〈継続力(忍耐力)をつける〉、〈笑顔で過ごす〉、〈計画性を持つ〉、〈文章力をつける〉、〈心の大きな人になる〉、〈誰からも愛される人になる〉、〈視野を広げる〉、〈規則正しい生活〉、〈恋愛上手になる〉、の 10 項目が複数の学生が挙げた内容であった。ここに挙げた、継続力(忍耐力)や文章力だけでなく、他にも〈理解力をつける〉、〈表現力をつける〉、〈字をうまくする〉という回答があり、学生たちの中で、今自分にない力を身につけたいという願いが見られる。回答の中には〈自己理解をする〉、〈大人になるために必要なことを得る〉、〈社会での自分の役割を理解する〉といった、まさに、エリクソンの同一性の確立に関する回答をなす学生もいた。また、〈規則正しい生活〉や〈部屋をきれいにする〉、〈食生活の改善〉など、日常生活習慣の確立に関する回答も多かった。さらに、〈誰からも愛される人になる〉、〈恋愛上手になる〉、〈結婚に向けて女性らしさを身につける〉といった、エリクソンの発達段階の青年期の次の段階、すなわち成人前期の親密性につながる回答をした学生もいた。

次に多かったのが、「学習・知識の習得」である。これは学生の本分であり、多くの学生が回答して当然の結果となった。本学が保育者(教育者)養成にあたる学校ゆえ、特に〈ピアノを頑張る〉、〈音楽を学ぶ〉、〈楽器を学ぶ〉と挙げた学生が多かった(「学習・知識の習得」項目のうち 37.5%を占めた)。

3 番目が、「貯金、お金の管理」である。これは、親から経済的に自立をして、今後社会に出ていく彼らにとって当たり前のことではあるが、しっかりと本学の学生がそれを意識していることが、今回の回答から知ることができた。

4 番目は、「社会人としての知識や常識(ルール)を身につける」である。本学は保育士・幼稚園教諭養成校として、1 回生後期に幼稚園教育実習が行われる。それを前提として前期配当科目として、実習基礎指導や基礎ゼミナールがあり、社会人としてのマナーや基礎知識を学ぶ機会を設けている。また、2 回生になってからもキャリアゼミナールや各種実習指導において、卒業後に向けた教育を推進している。学校としては、そういった講義の中で学生を、2 年間で社会人としての基本的な常識(マナー)を身につけさせていかななくてはならない。また学生たちも、そのような講義での働きかけを通じて、意識づけできて

表2 学生の自由記述のまとめ

カテゴリー名	内容 ()内は複数回答のあったもの	回答数	%
自己の確立	自己理解をする (5), 継続力 (忍耐力) をつける (4), 笑顔で過ごす (3), 計画性を持つ (2), 文章力をつける (2), 心の大きな人になる (2), 誰からも愛される人になる (2), 視野を広げる (2), 規則正しい生活 (2), 恋愛上手になる (2), 目標を立てられるようにする, 感謝の気持ちを持つ, 効率よく動けるようにする, 理解力をつける, 自立できるようにする, 先を見る, 責任感を持つ, 人のいいところを見つける, 表現力をつける, 字をうまくする, ダイエット, せっかちを直す, 結婚に向けて女性らしさを身につける, 大人になるために必要なことを得る, 社会での自分の役割を理解する, 自己中心的であることをやめる, 自分の能力を高める, 自分のダメなところを認められるようになる, 部屋をきれいにする, 食生活の改善	46	20.2 %
学習, 知識の習得	勉強を頑張る (20), ピアノを頑張る (10), 音楽を学ぶ, 楽器を学ぶ	32	14.0 %
貯金, お金の管理	貯金をする (16), お金の管理 (14)	30	13.2 %
社会人としての知識や常識 (ルール) を身につける	社会人としての知識や常識 (ルール) を身につける (21), 仕事に対するやる気 (自覚) (2), 挨拶をする, 政治に関心を持つ	25	11.0 %
コミュニケーション力を高める	コミュニケーション力をつける (14), 自分から発言できるようにする (2), 他人 (相手) のことを知る (2), 人の意見を聞く (2), 知らない人と話せるようになる, 言葉遣いに気をつける, 自分の思いを伝えられるようになる, 人に頼る, 相手の気持ちに寄り添えるようになる	25	11.0 %
余暇の利用	遊ぶ (7), 今を大切にする (3), とにかく楽しむ (2), 車を買う, 身体作り, スポーツをする, ボランティア, 友人を大切にする, 好きなものを食べる, 旅行	19	8.3 %
料理の練習 (習得), 家事	料理ができるようになる (11) 家事ができるようになる (7)	18	7.9 %
就活, 資格・免許の取得, アルバイト	就活 (4), 資格を取る (3), 免許 (車・バイク) (3), 卒業する, アルバイト, 給料が上がるように祈る	13	5.7 %
家族, 地域とのかかわり	親孝行 (3), 地域 (近所の人) との関わりを深める (3), 親との関係を整理する (2), 家族のことを知る, 母から学ぶ	10	4.4 %
感情のコントロール	感情的にならない (4), 精神を強くする (3), ポジティブになる, デリカシーを持つ, ストレス発散法を見つける	10	4.4 %

いったのではないかと考えられる。

同じく4番目が、「コミュニケーション力を高める」であった。保育者（教育者）としてだけでなく、社会人としても必要なコミュニケーション能力の獲得は、本学の学生にとっては、急務の課題である。保育士・幼稚園教諭は、子どもへの関わりだけではなく、保護者との関わりもそれ以上に必要である。つまり本学卒業後はすぐに自分自身の意識としても周りからも「大人」としての役割が待っている。また同僚の保育者、園長・副園長・主任といった経験を積んだ保育者との密接な協働も求められる職業である。筆者がこれまでの学生との関わりや、実習巡回の際に現場の園長先生等から聞いたことから、上手に自分を表現できない学生や大人としての意識の低い学生の存在が気になっていた。今回の自己分析シートの中にも、自らのコミュニケーション力の拙さを実感して、この項目を身につ

表3 千原(2006)による学生の自由記述のまとめ¹⁴⁾

項目	内容	回答数	(%)
身体的変化の理解と体力の維持	身体的変化・発達を理解する, 運動する, 性に対して自意識過剰にならない など	9	2.9%
知的発達と知識の拡大	学問を身につける, 知的な広さ, 抽象的に物事を考える など	33	10.6%
精神的自立と親孝行	精神的自立, 心理的離乳, 親からの自立 など	34	10.9%
情緒の安定と情操の発達	情緒の安定, 自分や他人を冷静に観察できる, フラストレーションの効果的な発散 など	32	10.3%
自己確立と価値観の確立	自信をつける, 器の大きい人になる, 自分の理解, アイデンティティの確立, 自分自身を見つめ直す, 価値観の確立 など	44	14.1%
職業の準備と経済的自立	経済的自立, 就職, 資格をとる, 卒業すること など	33	10.6%
家庭生活の準備	将来の家庭設計を考える, よい恋愛をする など	25	8.0%
対人関係や社会性の習得	対人関係(人に気が配れる), 相手の立場に立てる, 社会性を身につける, 人と合わせる, 周りの人の気持ちを考えて行動, 周りの人に感謝する など	92	29.6%
余暇の有効な利用	余暇を有効に使う, 趣味を身につける など	9	2.9%

(千原(2006) p.74 を筆者が改変して作成)

けたいとして, 記述している学生が多くいた。例えば、『人見知りで, 人とのコミュニケーションがあまり上手くないので, それを克服したい』や『コミュニケーション能力が著しく低いので, 今のうちに身につけておきたい』などの記述がみられた(同様のことを書いた何人もの学生の意見を要約した)。ただしこれは, 本学の学生だけの課題ではなく, 社会一般としての課題であると思う。いかにして, 学生にコミュニケーション能力をつけさせるかは, これからの大学教育における非常に大きなテーマであろう。

6番目は, 「余暇の利用」である。学生時代にやっておきたいこと, という問いに対し, 夏休みを控えた時期に回答を求めたこともあり, 筆者は最初この項目が上位にくるのではないかと想像していた。しかし, 学生の回答数としてはわずか8.3%であった。本学の学生が, <遊ぶ>, <今を大切に>, <とにかく楽しむ>といった, 余暇の利用に関する以上のことに重きを置いて回答をしていることは, 改めて本学学生の自分を見つめる意識の高さを感じた。

7番目は, 「料理の練習(習得), 家事」であり, これは「貯金, お金の管理」の項目が, 親からの経済的自立を踏まえてのことであるのに対し, 就労に伴う実家からの離脱や結婚に向けて, 親からの精神的自立を表した項目であろう。このことも多くの学生が考えていることがわかった。

8番目以降は, 割合としては4~5%台の回答数ではあるが, 学生にとって大事な項目が多くある。例えば, <給料が上がるように祈る>は, 就職を控えた学生の切実な思いが伝わってくる。また<親孝行>や<家族のことを知る>などは, 今まで心の隅にあったことが, 卒業・就労を控えて具体的にになってきたということであろう。最後の「感情のコントロール」は, 回答数が10で割合も最下位ではあるが, 情緒を安定させることは, これより上位の項目の土台にある部分ではないかと考え, 1項目を立てた。<精神を強くする>, <ポジティブになる>, <ストレスの発散法を見つける>といった回答をした学生は, 自らの内面にも目を向けることの必要性を実感しているのではないだろうか。

5. 先行研究との比較

前掲表2に挙げた結果を先行研究との比較で論じてみたい。2節で簡単に触れたが, 千

原 (2006) は、1993 年 7 月に 18 歳～23 歳までの 133 名の学生を対象に、“あなたにとっての現在の発達課題は何ですか”というテーマで自由記述を求め、その結果をまとめている。表 3 はその結果である。

表 3 の総回答数は 311 で、平均で一人当たり 2.3 個となる。これを今回の筆者のデータと比較するために、表 2 を千原のカテゴリ項目と似ているものに分類し、集計をし直した。その結果が、表 4 である。これによると、千原の調査でも多かった「自己確立と価値観の確立」と「対人関係や社会性の習得」は、筆者の調査でも多くを占めており、青年期の課題としての自己の確立やコミュニケーション能力の形成は、20 年少し経過しても、この時期の学生の課題であることに変化はないことがわかった。一方で「情緒の安定と情操の発達」、「家庭生活の準備」の項目については、いずれも 6 ポイント前後減少していることがわかった。また、「職業の準備と経済的自立」、「余暇の有効な利用」については、いずれも 4 ポイント前後上昇していることがわかった。この減少や上昇の要因については、1993 年当時と現在の経済状況（例えば、バブルの崩壊とアベノミクス）や家族を取り巻く状況の変化（例えば、昨今の離婚率の上昇、つまりひとり親家庭の増加）が想定されるが、今後より詳細に検討していく必要がある。

表 4 千原と筆者の項目比較表

千原項目	筆者項目	千原回答数 (%)	筆者回答数 (%)
身体的変化の理解と 体力の維持	余暇の利用の一部（身体作りをする、スポーツをする）	2.9%	0.9%
知的発達と知識の拡大	学習、知識の習得	10.6%	14.0%
精神的自立と親孝行	料理の練習（習得）・家事、家族・地域とのかかわり	10.9%	12.3%
情緒の安定と情操の発達	感情のコントロール	10.3%	4.4%
自己確立と価値観の確立	自己の確立の一部	14.1%	18.9%
職業の準備と経済的自立	貯金、お金の管理+就活、資格・免許の取得、アルバイト	10.6%	14.5%
家庭生活の準備	自己の確立の一部（恋愛上手になる、結婚に向けて女性らしさを身につける）	8.0%	1.3%
対人関係や社会性の習得	社会人としての知識や常識（ルール）を身につける + コミュニケーション力を高める	29.6%	21.9%
余暇の有効な利用	余暇の利用の一部	2.9%	7.5%

6. まとめ

本学本学科の学生は、2 年間の修学期間を経て、保育者（教育者）としてのそれぞれ志望の進路に向かって夢を実現させていこうとしている。本研究は、その 2 年目にさしかかった 2 回生の学生に、自己分析シートという形で、自らの発達課題（今しておきたいこと）についての自由記述を求め、その結果をまとめて考察した。

本稿では、最初にエリクソンの発達段階と、ハヴィガーストの発達課題について、青年期の部分についてのまとめを行い、その上で自己分析シートの分析結果の考察を行った。それによると、本学本学科の学生の回答で最も多かったのが、「自己の確立」についての記述であった。エリクソンが「同一性形成の過程は徐々に生成するゲシュタルト (evolving configuration) として現れてくる。生まれつきの体質、独自のリビドー欲求、恵まれた才能、種々の重要な同一化、有効な防衛、効果的な昇華及び一貫した諸役割、を徐々に統合する

一つのゲシュタルトである」⁵⁾と述べたように、自己同一性は、個人の身の回りに起こる様々な環境とのかかわりを通して、徐々に統合されていく。青年期にある本学本学科の学生も、講義・実習・様々な対人関係を通して、今まさにこれを経験していることとなる。これについては、田中(1992)が短期大学の学生を対象に「青年期後半に位置する短大生活という短い2年間においても彼らの自我に有意な変容があるのか」を調査する研究を行い、「短大生活2年間というものが「自我の完成」の構成要素のうち、青年期の発達課題としての「同一性」の確立と成人前期の発達課題としての「親密さ」の達成に深く関わっている事実が判明し」¹⁵⁾と、と結論付け、「同一性」の確立を通して成人初期の発達課題である「他者との親密な関係」の達成へ円滑に移行できるよう援助することが重要な課題として課せられる」¹⁵⁾と指摘しているように、これからの本学の教育においても、同一性の確立への援助は、大変重視されるべきことであろう。また4番目には、「社会人としての知識や常識(ルール)を身につける」と「コミュニケーション力を高める」が挙げられた。これは、ハヴィガーストの青年期の発達課題のうち、人生観の発達に通じるものではないだろうか。ハヴィガーストは、「青年期の最後の仕上げは、りっぱな人間やりっぱな市民の資格ともいえるべき、正しい価値判断の力や道徳的な態度を養うことである。(中略)社会の人々や制度と個人との関係、さらなる自然に対する人間の価値についての概念は、つぎに説明する二つの発達課題のなかに含まれている」¹⁶⁾と述べ、①社会的に責任のある行動を求め、そしてそれをなしとげること②行動の指針としての価値や倫理の体系を学ぶこと、の2点を挙げている¹⁷⁾。本学地域本学科の学生の多くが目指す保育職は、現実社会がよく見える(現れる)職場である。(例えば、子どもの貧困、子どもの虐待、養育者によるネグレクト等)大人として専門職としての立場・知識・援助技術が試される職業でもある。在学中にしっかり社会人としての知識・常識(ルール)を身につける必要がある。さらに、3番目と7番目には、それぞれ親(家庭)からの経済的自立と精神的自立を表す、「貯金、お金の管理」と「料理の練習(習得)、家事」が挙げられた。本学本学科の卒業生の中には、卒業後親元を離れ、他府県での就職を果たす学生もいる。また同一県内であっても、仕事の状況ゆえ独立して住居を構える必要のある学生もいる。このような事情を踏まえて、学生がしっかりと2つの自立について回答していることは評価できる。6番目の「余暇の利用」については、やや控えめな回答であった。8番目以降は、少数派ではあるが、学生の意見として尊重したい項目が多かった。

今回の回答で多くの学生が挙げた項目については、本学だけでなく2年間で卒業すると同時に資格取得、すなわち2年間で社会に出ることが決まっている多くの短期大学生に、共通することではないだろうか。また本学においては、筆者自身、学習・発達論や保育心理学演習、相談援助といった心理系科目を講義する教員として、学生の考える「発達課題」への支援に、本研究を今後役立てていくことが必要であろう。

今後の課題として3点挙げたい。第一には、今回は2回生の学生を対象に回答を求めたが、1回生入学時と2回生の卒業前の時期に同様の調査を行い、個人内の変化を見ることや、今回と同時期に毎年2回生に同様の調査を行い、経年変化を見ることを考えてみたい。第二には、自己分析シートの分析に関して、カテゴリー化をするにあたって、より精緻化した形にする必要がある。また、今回は千原(2006)の研究との比較を行ったが、その結果との相違点について、踏み込んだ議論ができなかった。さらに、他の先行研究との比較も、今後検討していく必要があるだろう。第三には、今回の分析は男女の性差による差異については検討しなかった。本学本学科においては、毎年1/3程度の男子学生の入学がある。今後は男女の性差についても検討することも必要となろう。これらのことを、今後明らかにしていくことによって、学生の青年期の課題に対する考えを、多面的な視点から得ることができるであろう。

最後になったが、今回の回答からは、本学本学科の学生が、自分の今あるいは将来について、とても真剣に考えていることが伝わってきた。改めて、この場を借りて回答を寄せてくれた学生諸君に感謝の念を表したい。

注釈

- 注1) 古沢 (1968)¹⁸⁾ は、自我同一性について、以下の5つの下位概念によって定義した。
 (i) 自己信頼感(自分は常に自分であるという意識と自分に対する確固としたわく組み)、
 (ii) 目標の設定(自分の将来に対する目標と使命感)、(iii) 対人関係の保持(親近感、愛情にうらづけられた人間関係がもっていること)、(iv) 情緒的安定性(些細な刺激に対しては、感情的に反応を示すことがないこと)、(v) 自分に対する容認(自分に対する評価・知見などが自己受容的であること)
- 注2) 2節で述べた、永井ら(2008)の思春期・青年期の発達課題のうち、青年期の発達課題とした4項目のみ。

引用・参考文献

- 1) 文部科学省：「平成27年度学校基本調査(確定値)の公表について」, http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2016/01/18/1365622_1_1.pdf (2016.11.29)
- 2) 文部科学省：「重要対象分野に関する評価書—若年者雇用対策— 3.各事業の評価 (a) キャリア教育実践プロジェクト」, http://www.mext.go.jp/a_menu/hyouka/kekka/08100103/009.htm (2017.2.1)
- 3) ベネッセ教育総合研究所：『進路選択に関する振り返り調査—大学生を対象として—平成17年度経済産業省委託調査報告書』, pp.112-113 (2005)
- 4) ベネッセ教育総合研究所：『学生満足度と大学教育の問題点』, p.56 (2007)
- 5) E.H.エリクソン著;村瀬孝雄, 近藤邦夫訳：『ライフサイクル, その完結』, みすず書房, p.99 (1989)
- 6) E.H.エリクソン著;村瀬孝雄, 近藤邦夫訳：『ライフサイクル, その完結』, みすず書房, p.98 (1989)
- 7) E.H.エリクソン著;村瀬孝雄, 近藤邦夫訳：『ライフサイクル, その完結』, みすず書房, p.100 (1989)
- 8) R.J.ハヴィガースト著;沖原豊, 荘司 雅子監訳：『人間の発達課題と教育』, 玉川大学出版, p.25 (1995)
- 9) R.J.ハヴィガースト著;沖原豊, 荘司 雅子監訳：『人間の発達課題と教育』, 玉川大学出版, pp.122-167 (1995)
- 10) R.J.ハヴィガースト著;沖原豊, 荘司 雅子監訳：『人間の発達課題と教育』, 玉川大学出版, p.27 (1995)
- 11) 永井徹監修, 井上果子・神谷栄治共編：『ライフサイクルの臨床心理学シリーズ2 思春期・青年期の臨床心理学』, 培風館, pp.91-92 (2008)
- 12) 千原美重子著：『人間関係の発達臨床心理学：自己実現への旅立ち』, 昭和堂, p.58 (2006)
- 13) 千原美重子著：『人間関係の発達臨床心理学：自己実現への旅立ち』, 昭和堂, pp.73-76 (2006)
- 14) 千原美重子著：『人間関係の発達臨床心理学：自己実現への旅立ち』, 昭和堂, p.74 (2006)
- 15) 田中正：「「自我の完成」への助成と短大教育：自我の変容過程に関する実証的研究を踏まえて」, 『名古屋文理短期大学紀要』, 17, pp.27-31 (1992)
- 16) R.J.ハヴィガースト著;沖原豊, 荘司 雅子監訳：『人間の発達課題と教育』, 玉川大学出版, p.153 (1995)
- 17) R.J.ハヴィガースト著;沖原豊, 荘司 雅子監訳：『人間の発達課題と教育』, 玉川大学出版, pp.153-167 (1995)
- 18) 古沢頼雄：「青年期における自我同一性の形成と親子関係」, In.依田新編『現代青年の人格形成』, 金子書房, pp.67-85 (1968)

